上町台地界隈の情報紙
うえまち
揮毫 一心寺 長老 高口恭行 師
2023年5・6月号
号外 2023 5
発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

「上町台地」名所図会

第7回

聖マリア大聖堂（中央区）

上町台地の北端、北大江公園のあたりにかつて巨大なキリスト教寺院が建っていました。南蛮寺と呼ばれ、1585年に高山右近が畿内で最も美しいと言われた河内岡山の教会堂を移築、完成後は多くの人が見学に訪れたそうです。日本で最も有名なキリシタンの一人である細川ガラシャが、生涯ただ一度訪れた教会も、南蛮寺だったといわれています。

そのガラシャが住んだ細川邸は上町台地にありました。いま、そこに建つのが聖マリア大聖堂です。1963年に現在の建物ができました。

まず、正面中央の聖母マリア（写真右）と、玄関前広場の左右にある高山右近・細川ガラシャの銅像が信者を迎えます。聖堂の中に入ると100を超える彩りゆたかなステンドグラスが。そして、2400本のパイプをもつパイプオルガンの荘厳な音色が人々をやさしく包みます。ちなみに、内陣の絵は巨匠・堂本印象が手がけました（写真左）。

まさに、大聖堂の名にふさわしい大伽藍。と同時に、キリスト教史における上町台地の重要性を示す〝歴史遺産〟でもあります。それを知ってこの建物を見ると、また違った感慨を抱くのではないでしょうか。

※聖マリア大聖堂の正式名称は「カトリック玉造教会」。

内陣の絵は堂本印象が手がけた

現在の建物は1963年に完成

中原文雄／写真
1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。
松本正行／文
1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。

※名所図会（ずえ）とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「WEBうえまち」（https://note.com/uemachi/）連載の『「上町台地」名所図会』より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。

相羽秋夫の らくごハローワーク

第17席 『湯屋番』の微妙に動く二つの目

湯屋とは、今日で言う銭湯・風呂屋・公衆浴場のことで、料金を取って入浴させる商売である。

飛鳥期（6世紀）に、奈良の寺院で人民救済のために大浴場を設けた。これを「功徳（くどく）風呂」と呼び、湯屋の始まりとされる。江戸期には、男女混浴の頃もあったが、風紀を乱すとの理由で分浴になった。

◇

居候ぐらしの男に湯屋での働きロの声が掛かる。番台（入口に高く設けた見張台）でないと嫌だと言うので、主人は「私の昼食の時だけだよ」と、番台を任せる。男は喜んで品定めを始める。〝気の効いた年増女が男に夢中になる。女の家に行き2人で酒を呑んでいると、近所に落雷がある。女が恐がり男に抱きついてくる……〟と妄想をふくらませた所で、男性客の「俺の下駄がねえ！」の声で我に返る。

男は「それなら、こちらの下駄を履いて帰ってください。順々に他のを履いてもらい、最後の人は裸足（はだし）で帰ってもらいます」。

◇

湯屋で働く人で番台を担当するのは、経営者やその家族が多かった。湯汲み・湯番・番頭などと呼ばれた。風呂を焚いたり湯客の体を洗ったりする男は「三助（さんすけ）」と称した。

湯屋にいた遊女は「湯女（ゆな）」と言ったが、現代風に表現すれば、ソープランドの女性とでも言おうか。

「浴衣（ゆかた）」は、湯上がりに着たくつろぎの衣類だが、室町期より盆踊りに使用してから、すっかり夏の和服の定番になった。

「湯屋温泉」という奇妙な名前の温泉がある。平安中期に発見された岐阜県の名湯、下呂温泉に隣接する。神経痛や胃腸痛に効用があるので、湯治場として有名だ。

古川柳に曰く。「開帳を裏から湯番拝んでる」。説明するまでもないであろう。落語の主人公が最も欲した光景である。罰当たりめが。

中原文雄／写真
1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。
松本正行／文
1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。

※名所図会（ずえ）とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「WEBうえまち」（https://note.com/uemachi/）連載の『「上町台地」名所図会』より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。

NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

お問い合わせはNPO法人「まち・すまいづくり」まで
TEL:06・6779・7222

「web版うえまち新聞」いよいよスタート！

2005年の創刊から2020年8月の休刊まで16年間、毎月7万5000部を発行してきた「うえまち新聞」が、web版として本格的に復活しました。

上町台地界隈のニュースやイベント情報、183号分のバックナンバーも掲載。連載記事も第1回からご覧いただけます。

協賛企業や地域の交流の場となる「うえまち長屋」の会員も募集中です。詳細はうえまち編集局へお問い合わせください。

住まいと暮らしの総合無料相談会

5月13日、6月10日（土）
10時～12時

弁護士、司法書士、一級建築士、税理士、宅地建物取引士の当法人会員が専門知識を生かし、住まいと暮らしのご相談に応じます。電話またはHPよりお申し込みください（電話受付は平日10～15時）。

主催：NPO法人まち・すまいづくり（市立社会福祉センター指定管理者）
電話：06・6779・7222
場所：大阪市立社会福祉センター（天王寺区東高津町12・10）
後援：天王寺区役所

第41回うえまち寄席

5月27日（土）14時開演

桂佐ん吉、桂ちょうばによる、古典を中心とした落語会です。電子チケット販売サイト「TIGET（チケット）」からも予約可能です。

場　所：一心寺南会所（天王寺区逢坂2・7）
入場料：2000円

上町台地界隈の情報紙
うえまち
揮毫 一心寺 長老 高口恭行 師
2023年5・6月号
号外 2023 6
発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

「上町台地」名所図会

第8回

阿倍野七坂（阿倍野区）

南北に細長く伸びる上町台地は北のほうが高く、最高地点は法円坂一帯で標高は約25メートルにもなります。南に行けば行くほど低くなるものの、それでも阿倍野区のあたりの高さは約15メートル。上町台地の西側は外海でしたから、高い台地は波で削られ北から南にかけて急峻な崖が続きました。

しかし、崖のままでは生活するには不便です。そこで、人工的に坂がつくられました。当然ながら、その多くは東から西に向かっての下りです。ところが、阿倍野区の南西部は浸食により谷が入り組んでできたため、南北にも数多くの坂がつくられました。そして、いつしか阿倍野神社を囲むように、ある5つと、少し北にある2つの計7つの坂を、「阿倍野七坂」と呼ぶようになったのでした。

「さくら坂」（写真右）は桜の名所だったのでしょう。「みどり坂」「みなみ坂」の由来はよくわかりません。「やしろ坂」は阿倍野神社のお社から、「みや坂」も同じくお宮からの命名だと思われます。「相生坂（阪＝石碑は阪）」（写真左）は接する相生通りからその名がつけられたのは間違いありません。「相親坂」の「相」は相生通りから、「親」はそのあたりで人々が出会って親しく挨拶を交わしたことから来たそうです。

いずれも住宅街にある小さな坂です。石碑がなければ気づかず通り過ぎてしてしまいそうですが、その分、生活の温もりを感じます。いつまでも大切にしたい風景です。

「相生坂（阪）」は相生通りから

「さくら坂」は桜の名所が由来

中原文雄／写真
1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。
松本正行／文
1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。

※名所図会（ずえ）とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「WEBうえまち」（https://note.com/uemachi/）連載の『「上町台地」名所図会』より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。

相羽秋夫の らくごハローワーク

第18席 お裁きはこれぞ『三方一両損』

奉行という役職名は、時代で異なるが、江戸期には、将軍直轄の勘定奉行（今の財務大臣）、寺社奉行（同文科大臣）と老中管轄の町奉行（同裁判官）の3奉行所があった。

江戸町奉行は北町と南町の2つに分かれ、1か月交代で法廷を開いた。休みの月は、訴訟準備についやした。たくさんの人が担当したが、大岡忠相はとくに裁定が公正で人情味があった。そこから「大岡裁き」という名句も残っている。8代将軍吉宗に認められ老中にまで昇格した。

奉行の下には、検察官に当たる与力（よりき）、その下に警察官に当たる同心（どうしん）が存在した。

江戸以外の地にも町奉行があった。それを遠国（おんごく）奉行と称し、京・大坂（東町・西町）・伏見・駿府（すんぷ＝静岡県）・長崎・山田（三重県）・日光・堺・佐渡・下田・浦賀・箱館（函館）の12か所に設けられた。

「遠山の金さん」こと遠山金四郎（景元）も江戸町奉行の一人で、江戸後期の名奉行として知られている。この頃の奉行の年俸は2500両だったというから、相当な高給取りである。大岡越前守が一両損するぐらい、たいしたことではない。

◇

3両の大金を拾った正直者の男、落し主が分かったので本人に届けると、一本気の落し主「落とした金は俺の物ではない」と拒否する。そこで受け取れ、受け取れないと押し問答になり、大喧嘩が始まったので仲裁人が奉行所に訴え出る。

裁きを担当した北町奉行大岡越前守忠相（ただすけ）は、2人の律義さを誉め、3両に2人に分け与える。「おまえ達は3両を素直に受け取っていれば良いものを、2両になってそれぞれ1両の損、奉行も1両出して損。これ〝三方一両損〟だ」と見事な判決を下した。

そのあと奉行のはからいで祝宴となり豪華な膳が出る。大岡が「空腹じゃと言って、あまり食すなよ」と声を掛けると、「へへ、多かあ（大岡）食われね え」と1人が答えると、他方「たった一膳（越前）」。

大人のための文章教室

ライター・編集者　松本正行

「頑張りたいと思う」では覚悟が足りない？

自己紹介でよくあるフレーズのひとつです。開幕前のプロ野球選手なども使いそうですが、ちょっと待ってください。「頑張る」を実行するのは自分です。そうであるならば、わざわざ「思う」をつける必要はないのでは。むしろ、「思う」をつけたことで、「本当に頑張るつもりなの？覚悟を決めろ！」と言われかねません。

チームの役に立てるよう、これからも頑張りたいと思います。

読みやすい文章は、文末がすっきりしています。無駄な言葉がなく誤解を生まないのです。文意が明確になるだけでなく、締まったスマートな（＝賢い）文章にもなります。

よく使われる、あいまいな文末は他にもあって、たとえば「彼の失敗だろうと思う」は「彼の失敗だと思う」にすべきでしょう。一方、「お詫びしたいと思います」は「思う」をつけたことで相手に失礼な表現になるので、絶対に避けるべき。「お詫びします」では丁寧さに欠けると考えるのなら、「お詫びいたします」や「お詫び申し上げます」を使うようにしましょう。

チームの役に立てるよう、これからも頑張ります。

上町台地上にある高津高校出身。新聞社・出版社勤務を経て、現在、Webや雑誌等で活躍中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。

第16回
夕陽丘うえまち写真コンテスト 受賞作品

住吉大社～一心寺・下寺町～大阪城までの上町台地の風景や
そこで暮らす人々をカメラに収めてください。
緑豊かで、歴史と文化いっぱいの上町台地。
その風景や、そこに暮らす人々の姿を写真という一篇の「詩」にしていただく。
写真というものを通じて、この地域の素晴らしさを再発見できる、そんなコンテストでありたいと願っています。

主　　催：夕陽丘うえまち写真コンテスト事務局
応募総数：128名・331作品（一般276作品・学生55作品）
審　　査：江口保夫（フォトキョイ）、髙口恭行（一心寺 長老）
平田秀瑞（一心寺 執事）、清水ミサコ（ラメカカメラ堂）
田中一泉（日本写真映像専門学校）
髙口真吾（夕陽丘うえまち写真コンテスト事務局長）

審査員総評

審査委員長　江口保夫（フォトキョイ）　私はこの写真コンテストを16年毎年すべて審査担当してきておりますが、年を追うごとに作品のレベルが上がってきているのが伺えます。コロナ禍で撮影活動に色々制約されたかと思いますが、それでも写真の内容の充実や被写体の広がりが伺え、今まであまり見かけないような写真も、少しずつ見られるようになってきています。今後とも皆様の素晴らしい写真の眼で、新しい被写体・内容を見つけ写真にし、どしどし応募いただきますよう、よろしくお願いいたします。

審査員　清水ミサコ（ラメカカメラ堂）　当コンテストも16回を迎えました。出藍の誉れと申しますか、回を重ねるたびに予想を超えた作品が登場し、ご応募くださる皆様にコンテストも私も育てていただいていると感謝しております。

また、過去にも言及したことがあるかと思いますが、残念ながら受賞には至りませんでしたが、非常に良い作品がかなりありました。

シンプルですが①なぜ撮影するか（それが当コンテストの主旨に合っているかも重要です）②どう撮影するか（構図や露出、タイミングなど）③適切なプリント作業を行えているかの三段階が必要ではないかと思っています。

今回も素材は良いのに、プリントがもう一つだったり、力のある写真でも当コンテストのカラーではないものが多数ありました。加えて、過去の受賞作品とテーマが近いものは、どうしても選ばれにくい傾向にあります。

今回の受賞作品は、それらを超えており、個人としても「へえ、こんな風景があるのか」と非常に楽しませていただきました。受賞された皆様、おめでとうございます。また、次回の作品をお待ちしております。

審査員　田中一泉（日本写真映像専門学校）　今年度は例年に比べてスナップショットの精度が格段に向上していました。

その分、ストレートなポートレートが少ない印象だったのが少し残念でしたが、それでも活気あふれた素晴らしい作品が多く審査させていただくことがとても楽しかったです。

様々な制約が解除され、以前の日々に少しずつ戻ってきています。来年は更に素晴らしい作品と出会えることを楽しみにしています。

最優秀作品賞・上町台地パンフ賞

「夕暮れの大阪城梅林」
笠井忠

この日は雲が多く、綺麗な夕日は見ることができませんでしたが、日が沈む頃には雲が夕日に染まり、見頃を迎えた梅林の紅梅が引き立って見えました。大阪城天守閣のライトアップが始まると、黄金に輝いているようにも見え、印象的な夕暮れの光景でした。

江口保夫（フォトキョイ）以下江口　初めてこの作品を拝見したとき、この写真は何か賞を取るなと予見できました。大阪城の梅林の写真はよく見ますが、あまり焼けなかった夕雲が功を奏して紅梅や白梅を目立たたせてくれました。更にライトアップされた天守閣をより印象的に見せてくれました。

清水ミサコ（ラメカカメラ堂）以下清水　重々しさに艶やかさが引き立つ不思議な魅力があります。なんとなく泉鏡花っぽいなあと感じました。この写真は撮影しようと思っても簡単に撮れるものではないですね。シャッターチャンスを待ち、ものにされたことに脱帽です。

田中一泉（日本写真映像専門学校）以下田中　写真は英語で photograph と言い換えられますが、その原義は「光の記録」になります。写真は光が重要なことは明らかですが、人工光と太陽光からなるこの光景は美しく、鑑賞者に上町台地の素晴らしさを伝えています。

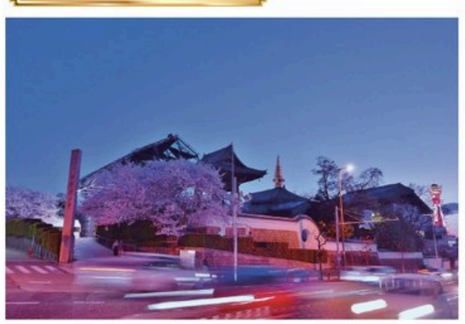
七坂賞

「家路へと」
原田修身

冬の夕刻、源聖寺の白土塀に金台寺御堂のシルエットがくっきり。その横を家路へと急ぐ女性が足早に通りすぎた。

清水　撮影が難しい七坂ですが、写真に表したい目的がはっきりし、その表現に成功されていると感じました。良い被写体を得たことは幸運かもしれませんが、それの切り取り方がとてもいいです。抜群の位置でシャッターを押していますね。

一心寺賞



「蒼き刻（あおきとき）　花も朧（はなもおぼろに）に　融けこんで（とけこんで）」
栗原正隆

日も暮れて、だんだん風景がくすんだ蒼色に染まってゆく幻想的なブルーモーメントの刹那。一心寺の桜も蒼い世界に融けだすように、朧げになってゆきました。

田中　とてもよく視られて、丁寧に撮影されています。画面の中の通天閣や電柱等がとても効果的です。また長時間シャッターを開けたことで車がぶれていますが、それは作者が一心寺の美しさに心奪われ眺めていた時間を指しているかの様です。

人形フェス賞

「優雅（ゆうが）な女人（おんなびと）」
松居正博

歩道に多くの人、スマホで写す人が多い中、撮影することが大変でした。

江口　応募点数が少ない人形フェス賞、その中でも花魁の行列を大胆に縦位置で、花魁の表情や着物などを見事に切り取られました。かなり強烈な写真ですね。

上町台地パンフ賞

「未来へ」
市田汐里

歩道橋から通天閣を撮っていると、かわいい子供たちが走っていたので少しフレームインしました。

江口　天王寺駅の歩道橋からの通天閣の風景写真。ただそれだけではなく、電車や線路を入れ、自転車や子供たちの動きを上手く捉えておられます。どこにでもありそうな情景ですが、味のある作品です。

「千春楽」
林宏行

近所の桜を撮影していると、仲の良さそうなお相撲さんが通りかかりました。着物にも光が入っていて、チャンス!! と思い、シャッターを切りました。

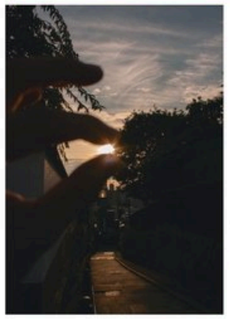
清水　桜とお相撲さん。最強タッグですね。三人のお相撲さんの背中に目を引かれ、思わず笑ってしまいました。構図もさることながら、プリント全体の印象がとても良いです。着物の濃い色が桜の淡さと無理なく調和しています。

「下町の地蔵盆」
稲葉太一郎

毎年8月23･24日に地蔵盆をまつります。電車道と路地の間の狭い所で下町の人達が供養します。

田中　地蔵盆を中心に文化が根付いていることがわかる面白いスナップショットです。二手に分かれる道、親子、電車、全てが効いています。情報が多いにも関わらず整理がされている上品な作品です。

青春賞



「pick the sunset」
阪口太靖

夕陽丘で夕日が一番キレイに撮れるのはどこかを探してみたら清水坂が一番キレイに撮れると思ったので、そこを選びました。ただ夕日を撮るだけでは、あまり面白くないので、夕日を摘んでいるような構図にして、面白い写真にしました。

江口　このように何かをつまんだり、持ち上げたりする写真はスマホでよく撮られていますが、楽しいですね。夕焼けに染まる清水坂の様子を上手く捉えられました。

「桜（さくら）の空（そら）」
本池若菜

桜が一面に広がっている様子がまるで空のようだったので、「桜の空」にしました。その下で幸せそうに笑っている人の表情にもぜひ注目してほしいです。

田中　マスクが緩和され、桜の下に若い人たちが集まる様子を私もよく見ていました。写真は5Wがとても大事です。今がどのような時代で、何が写っているのか。桜の現像も美しく、とても大胆なカットになっています。私たちにとって大切な1枚だと思います。

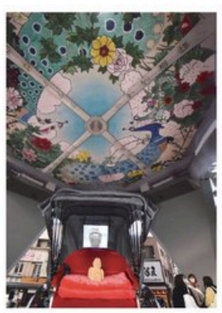
「「あたりまえ」を支えるもの」
武村悠真

人々の日々を支え、走り続ける阪堺電車。夕暮れの時間に、上町台地南部を走る路面電車を見て思わずシャッターを切りました。

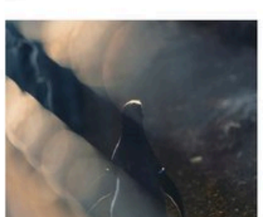
清水　何気ない日常の写真で、人目を引く華やかな作品の中に埋もれてしまうような、蜻蛉のようなはかなさを感じます。そんな永遠に消えてしまうような一瞬を見事にとらえていると感じました。思わずシャッターを切った感情が、ダイレクトに伝わってきます。

特別賞

「朝のあったか広場」
上杉裕昭



「通天閣ビリケン神殿」
川根一雄



「夕焼け小焼けでまた明日」
深瀬真和

「ウクライナから参加」
下農昭夫

※作品のコメントは応募者の意図を尊重し、原文通り掲載しております。

第17回夕陽丘うえまち写真コンテスト
作品募集中～ 2024.3.31

住吉大社～一心寺・下寺町～大阪城までの上町台地の風景や、そこで暮らす人々をカメラに収めてください。募集要項はホームページにて。応募用紙のダウンロードなども可能です。

夕陽丘うえまち写真コンテスト

スマホ賞　作品募集

大阪城～下寺町～住吉大社の風景や人、出来事をスマホで撮影し、メールで送ってください！ 応募方法など詳細はホームページにて。

夕陽丘　スマホ賞

公式HP

【問い合わせ】
夕陽丘うえまち写真コンテスト事務局
〒543-0062
大阪市天王寺区逢阪2-6-13 B1F
一心寺シアター倶楽内
TEL:06-6774-2877　FAX:06-6774-4003
https://isshinji.net/photocon/
kura@isshinji.net